

## 成長期におけるサッカー傷害

大森 豪 (おおもり ごう)

新潟医療福祉大学 健康科学部健康スポーツ学科

サッカーは世界中で最も人気の高い球技の1つであり、我が国における競技人口は約750万人とされている。また、子供が将来なりたい職業ランキングの調査では、小学生男子の1位、中学生男子の2位がサッカー選手となっている。サッカーは、走る、蹴る、接触するという基本動作にヘディングやスローインと言ったサッカー特有の動作が加わり、さらに高強度（ダッシュ、ジャンプ、ターンなど）での運動時間が長いと言った競技特性を有している。一方、成長期の大きな身体特性に骨端線の存在が挙げられる。骨端線は骨強度としては脆弱であり関節近傍に位置して靭帯や筋・腱の付着部に含まれる場合も多いため、成長期のスポーツによる急性外傷やoveruseによる慢性障害の発生部位として注意が必要とされている。サッカーにおいては、打撲や捻挫と言った一般的な外傷に加えて下肢を中心とした骨端線損傷や離解、腱付着部剥離骨折などの急性外傷やSever病、Osgood病やIselin病などの骨端症と言われる慢性障害が好発する。これらの外傷、障害は適切な初期対応を行えば良好に回復するが、時として成長終了後に遺残障害を生ずる。本講演では、成長期のサッカー傷害について骨端線の影響を中心に病態や治療、予後について自験例と文献考察を踏まえて概説する。